

2019年12月8日(日)／説教者：國分美生

説教：「政治と祈りと讃美」

聖書：ルカによる福音書1:46～56

マリアは受胎告知を受けたのち親戚であるエリサベトを訪問します。その時に歌われた讃歌は、神がマリア自身に成そうとしている喜びと、イスラエルになそうとしている喜び…小さきものを顧みて用いられる神、そして、イスラエルに対し憐みを忘れることのない神への賛美です。

預言者ミリアムを記念する名前のこの少女はガリラヤの小さな村ナザレ住んでおり、貧しく、社会の中でも低い階層にいる少女でした。そして置かれている場所から社会が飢える者と富んでいる者との引き裂かれている現実を見据えており、そのような闇の深い社会に救い主が来られることを待ち望んでいた者であったことを、ルカ福音書から知ることができます。

「神はそのみ腕で力ある業をなさいました。おのが心の思いの尊大な者らを散らされました。権力者らを王座から引き下ろし、卑しい者たちを高くあげられました。飢える者たちを善きもので満たし、富んだ者らを空手で追い払われました。」

よくよく読んでみますと、このマリアの祈りの言葉は、非常に政治的です。私たちの生活もそうであるように、マリアの生活も政治とは切っても切れないものでした。

マリアは「今からのち、諸々の世代は私を幸いな者と呼ぶでしょう。力ある方が私に大いなることをしてくださったからです」と讃美します。社会においては価値なきものとされていた自分を、神が顧みて用いられようとしていることへの感謝です。そして神は搾取され貧しく、暴力を受け、差別されている者に特別な注意を払われ、おごり高ぶるものを打ち砕かれる。それは、富める者と貧しい者、権力者と抑圧を受けている人々という構図が取り払われて、神の御業によってあたらしい世界が構築される希望です。このマリアの讃歌から浮かび上がるイスラエルの神の姿は、そのままイエス・キリストの姿と重なります。

始めガブリエルの受胎告知を聞いたときマリアは非常に困惑しましたし、ヨセフには離縁されそうになるし、周りからは陰口も言われたでしょう。そんなマリアの口から讃美があふれたのは、この幼子の誕生によって世界が変わる、神の御業によって世界が正常な形へと作り替えられる、という希望に彼女が満たされたからでした。

救い主の具体的な働きに思いをはせ、そして希望をいただきながら、私たちも、祈り、讃美し、行動していく教会でありたいと思わされます。(国分美生)